医師引き揚げ拡大

道内地域病院

新たに5カ所
診療の縮小も

新研修制度で大学人材不足

道内の公立病院などに医師を派遣している北大、札幌医大、旭川医大の三大学が各地の病院から続々と医師を引き揚げている。一日、新たに道内五つの病院が、医師の引き揚げや退職により、診療体制縮小を迫られていることがわかった。二〇〇四年四月、新人医師に臨床研修を義務付けた制度の導入により、大学内の医師数が大幅に減っているのが直接の原因で、四度目の異動期にあたる今春、医師引き揚げによる医療の空白はさらに拡大する様相を見せている。

（関連記事37面に）

臨床研修制度では、新人医師が研修先の病院を自由に選択できるようになったことから、医師は首都圏などの有力大学や有力民間病院を選択する傾向が強まり、地方大学医学部からの医師派出が進んでいる。このため、春の異動期のたびに、大学が地方病院に派遣している医師を引き揚げる事態が繰り返されている。

道内三大学などは〇四年四月以降の二年間で道内百六の自治体病院の四分の一に当たる二十六病院から八十七人の医師の派遣を打ち切ったり引き揚げたりし、その後も医師の空白が続いている病院は多い。今春の医師引き揚げにより、地域医療の危機的状況に拍車がかかるのは必至だ。

○今年になって医師引き揚げや診療体制縮小の恐れが出ている病院（2月1日現在）

新たに医師の引き揚げ

ならが判明したのは、旭川赤十字病院（後藤藤院長、七百八十五床）、市立室蘭総合病院（近藤哲四十八床）。このほか、市立根室病院（羽根田俊院長、百九十九床）では、内科の常勤医の派遣打ち切りを決めている。旭川医大が新たに外科の常勤医派遣医の一人は十月以降の勤務を保留している。

市立室蘭総合病院では、人減らすため、同病院は独自に通勤医を確保、三人体制を維持する。ただ、二人も三月末で引き揚げる方針を固めた。

札医大は旭川赤十字病院に小児科医三人を派遣しているが、今春から一人は、札医大が皮膚科の常

室蘭内中標津町の町立中標津病院（栗林弘院長、百九十九床）、留萌管内羽幌町の道立羽幌病院（奥雅志院長、百二十床）、根室管内羅臼町の羅臼町国保病院（高橋稔院長、

臨床研修制度　大学医学部を卒業した新人医師は卒業と同時に出身大学の教授を頂点とする医局に所属し、各専門科に分かれるケース が多く、「専門以外を知らず、幅広い基礎的な診断能力に欠ける」との批判が強まった。このため、さまざまな病気に対処できる能力を高める目的での研修制度が導入された。

卒業後、医師免許を取った新人医師に2年間の臨床研修を義務付けた。研修医は、大学病院や厚生労働省の指定を受けた病院で、原則として1年目は内科、外科、救急部門、2年目は小児科、産婦人科、精神科、地域保健・医療などを研修する。従来、研修制度が導入された。

北海道新聞　2007. 02. 02